



周王朝の衰退② (滅亡のパターン)

4月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年4月11日(火)

武王の後、成王・康王・昭王と続いて盛んであった周王朝も、次第に衰退してゆく。刑罰を重くし、武力侵攻を繰り返して無理を重ねる。そして十一代目の厲王の代を迎えた。

厲王は栄公を執政に立てたが、栄公は利益重視の新興勢力で、利益を求めて事業を起した。その利益をあてに厲王は暴政を布き、贅沢にふけた。

側近の中には、「国の利益は、万民の共有すべきもので、王が独り占めしてはよくない。祖先の文王は、あまねく民に利をもたらして国の礎を築く、とされています。」と、諫言したが、受入れなかった。

国中に批判の声が高まってきたが、厲王は衛の国から巫女を呼び寄せ、そのお告げを頼りにして批判する者を摘発して、片端から処刑した。悪口は聞かれなくなったが、諸侯の来朝もふつつりと絶えた。

「どうだ、押さえつけたら、誰も文句をつけぬわ」、側近の中には、「民衆の口を塞ぐのは、水をせき止める以上に危険です。水が堰を破れば、大きな被害が出ます」、「水を治める者は、水路を開いて水を流し、民主を治める者は、民衆の口を開いて発言させるのです」、と言った。

このような状態が3年続き、ついに人々は一斉に蜂起して、厲王は彘に逃れた。その後、王のいないまま側近の召公・周公の両大臣が政治を担当し、この時代を「共和」と呼んだ。

共和の14年厲王が死んで、「宣王」が立った。

宣王は厲王の失敗を見ていたので、異民族対伐の軍を起こし、財政を改革するなど積極策をとり、効果はあったが、王室の衰微はもはやとどめるすべもなかった。

宣王の子、「幽王」が即位して2年、大地震が起こって、三筋の大河の水が涸れ、周王朝の神の住む岐山が崩れた。

幽王は褒姒という女をこよなく寵愛し、褒姒が生んだ伯服を太子にしようとした。従来の妃と太子を廃しようとしたのである。

史官の伯陽はこれを見て、「もはや手の打ちようはない、周の禍は決まってしまったのだ」、と言って嘆息するばかりだった。

その後、「平王」は位につくと、蛮族の侵寇を避けて、都の豊邑を引き払い東の洛邑に国都を移し、以後春秋戦国の世となる。

参考：(司馬遷史記、周本紀、徳間書店)